博士論文要旨

我々にとって、「人」と呼ばれる存在者はもっとも身近で馴染み深いものである。我々がともに社会生活を営む存在者のほとんどすべてが人であり、我々は、人であるかそうでないかとよくよく考えて判断する間もなく、それらを瞬時に見分けられる。しかし、このことは我々が人という存在をよく理解できているということを意味しない。我々の日常を振り返っても、あるいは、哲学においても、人 (person) の概念は必ずしも一義的に捉えられるわけではないのである。このことは様々な哲学上の問題圏における人の概念に関する見解の不一致をもたらす。

人の概念をめぐる見解の不一致に起因する哲学的諸問題は、いかにして解決されうるか。その方途のひとつとして、人はいかにして理解されるべきか、その必然的なあり方の解明が鍵となることは疑いえない。そこで、本論考では、人の概念についての必然的なあり方（我々は人という存在をいかにして理解すべきか）についての探求が試みられた。その手がかりとして、P・F・ストローソンが『個々のもの』（原題 *Individuals*）でて提起した「人の概念は原初的である」という主張（以下、「原初性テーゼ」と呼ぶ）を中心に据えて、このテーゼの解明が行われた。

まず、序章では、原初性テーゼがいかなる主張であるかを確認するため、それが先行的研究においていかに受け入れられてきたかを、とりわけ、多くの批判にさらされてきた（１）ストローソンによる「人」の用語法、（２）P 述語、M 述語という概念区分、（３）一人称代名詞「私」の用法、という三つの論点に焦点化して概観を行った。

第一章では、予備考察として、原初性テーゼに関連する諸概念（述語の適用、属性の帰属、P 述語および M 述語）について整理を行った。そのうえで、原初性テーゼを構成する主語「人」と述語「（は）原初的である」の各々の意味を確認し、原初性テーゼとして主張されることの意味を明らかにした。原初性テーゼにおいて「人」として言及されるものは、人称代名詞（「私」、「あなた」、「彼（女）」、「我々」、「彼（女）ら」など）や人を指示する語彙（「あのひと」、「このひと」など）によって指示されうる対象であり、また、P 述語と M 述語を適用することで、P 属性と M 属性を適切に帰属させることのできる存在者であること（本論考ではこのような存在者を［P^{St}］と呼ぶ）が確認された。そして、このような意味での人の概念が「原初的である」とは、我々が世界をそのもとで思考する概念枠において、［P^{St}］としての人の概念は心の概念や身体の概念によって分析されえない、つまり、人の概念は心や身体の概念の被説明項として機能することはなく、説明項として機能するということ（そして、このような概念間の関係について、説明項として機能する概念は「一次的である」、被説明項として機能する概念は「二次的である」とその位階に応じて順序づけられること）が確認された。

第二章では、ストローソンの企図する記述的形而上学が、我々の概念枠に関する経験的記述ではなく、我々の概念枠の必然的なあり方（ないし我々のア・プリオリな認識）についての記述を意図するものとして理解されなければならないということが確認された。また、ストローソンによる独自の同定理論についての検討を行い、彼が、人というカテゴリーに属す個別の存在者についての同定（他から区別された単一の個体として特定する認識的行為）が、他のカテゴリー（心や身体）に属す個別の存在者の同定に依存せずになされうることが見出す（彼はまた、このような同定可能性非依存的な特徴は、人とは別の、物質的なもののカテゴリーに属す個別の存在者についても当てはまることを見出す）ことが確認された。第二章で展開された議論により、原初性テーゼの形而上学的探求における位置づけと、原初性テーゼを下支えする同定理論が確認されたことで、原初性テーゼがいかなる形而上学的主張として理解されるべきかが明らかにされた。

第三章では、第一に、ストローソンが原初性テーゼにより解決を試みる問題を明らかにし、そのうえで、彼がデカルト主義および非所有論に認めた問題点を詳らかにした。そして、原初性テーゼを承認することで、デカルト主義および非所有論の両方が陥る問題がいずれも回避されること、また、このテーゼのもとで、「私」の二重性が調停され、独我論からの脱却に成功することが確認された。

第四章では、原初性テーゼの妥当性が検討された。本論考では、ウィリアムズによる反論を取り上げ、その論証の再構成を行った後に、原初性テーゼを擁護する観点から応答の可能性を探った。考察の結果、いずれの反論も、原初性テーゼのもとで措定されるべきではない、人についての概念的理解の混入にもとづいており、それゆえに退けられるべきであるということを明らかにした。

本論考は、以上の考察を踏まえて、ストローソンが「人」と呼ぶものが、我々が「誰か」と呼ぶもの（いかなる概念的理解をも前提しない段階での不特定の人）の概念によって誤解なく理解可能であること、またストローソンがある箇所で述べた「人」と「人間」の共外延に関する主張が退けられるべきであること、これら二つの理解が人と物質的なものの二元論的世界観を、我々が世界について抱く日常的な世界理解の枠組みをもっとも整合的に説明するための図式として理解可能であるということを明らかにした。

以上により、本論考は、人の概念についての必然的あり方として、原初性テーゼが承認されるべきであるということ、そして、このテーゼが人をめぐる哲学・倫理学的問題圏に極めて重要な意義をもつことまでを示しえた。

論文審査結果の要旨および担当者

提　　出　　者	鹿野　祐介
論文審査担当者	（主査）教　授　直江清隆 教　授　荻原　理 准教授　原　塑 准教授　城戸　淳 准教授　村山達也
論　　文　　名	人の概念は原初的である――人をめぐるストローソンの「記述」――

P・F・ストローソンは主著『個々のもの』(1959) の中で「人の概念は原初的である」という原初性テーゼを立てている。彼の記述的形而上学の中で、人は、ものと並んで、我々の存在者理解の基本単位と位置づけられるにもかかわらず、これまでこのテーゼの検討は十分にされてこなかった。本論文は、厳密なテクスト解釈に基づいて原初性テーゼの意味を詳らかにし、その正当化根拠と哲学的意義を明らかにしたものである。

原初性テーゼの意味が明らかにされる序章では、物質的状態に関して帰属させられるＭ属性と意識状態に関して帰属させられるＰ属性とが区別される。この両方の属性が適切に帰属可能な存在者である人の概念が一次的なのに対し、人の概念によって分析可能な心や身体の概念は二次的だとされる。

第二章では、世界の中に位置する存在者の同定に注目する。個別者の同定のためには、当該の存在者の時空間上の位置が特定が必要であり、そのためには概念枠は時空間的体系から成っていなければならないとされる。その上で、人のカテゴリーに属する個別者は、ものと並んで、これら以外のカテゴリーに属している個別者への同定とは独立に同定されうるという点で基本的であるとされる。

第三章では、上記の議論に基づいて原初性テーゼが導出される。ストローソンの問題意識が、①P 属性がＭ属性と同じものに帰属させられるのはなぜか、②P 属性が何ものかに帰属させられるのはなぜか、という２つの問いに説明を与えることにあるが、論者は、ストローソンが人の概念に関して異なる見方を展開する有力な見解（デカルト主義、非所有論）に対していかなる仕方でその内的不整合を指摘し、原初性テーゼを導出するかを緻密に分析する。

第四章では、ストローソンに対する主要な批判を検討し、それに応じて見解の修正を図る。すなわち、彼が扱う人概念が当てはまるのは、生物種としての人間ではなく、Ｍ属性とＰ属性の両方が帰属可能な、[PSt] として規定される限りでの人であり、こうした人について「なぜ人にＰ属性の帰属がなされうるか」という問いが不適切であることが示される。論者は、ここから、原初性テーゼの主題にふさわしいのは、意味が曖昧な〈人〉の概念ではなく、〈誰か〉という概念だと主張する。

終章では、以上の議論に基づき、Ｐ属性が帰属させられうるのは、心や身体の概念の常に説明項としてのみ機能する〈誰か〉に対してのみであるという修正された原初性テーゼが主張される。この原初性テーゼは、人をめぐる哲学・倫理学に共通の形而上学的基盤を提供するとされる。

これまで、人の概念は、さまざまな哲学・倫理学領域で議論されてきたが、人が、その必然的あり方として、どのような存在者として理解されているかは十分には明らかにされてこなかった。本論文はストローソンの記述的形而上学において、人の概念が、原初的であり、われわれの存在者理解の最も基本的な単位をなすことを明らかにした点で、大きな哲学的意義をもつ。よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。